

CS-67

土木史は何のためにあるか

横浜国立大学大学院工学研究科 フェロー会員 合田良実

1. まえがき

この度の共通セッションテーマ『何故、土木工学の基礎は土木史なのか?』は、面白い問い掛けである。土木史は工学なのか、それとも歴史学の一分野なのかの議論を呼び起こす。土木史の意義を考える一人として、いろいろな専門家がその分野の史学をどのように考えているか、若干の調査を行ってみた。

2. 歴史家の立場

最古の歴史家といえばヘロドトスと司馬遷の名が挙がる。ヘロドトスの『歴史』の序節は、“本書は……、人間界の出来事が時の移ろうとともに忘れ去られ、ギリシヤ人や異邦人の果たした偉大な驚嘆すべき事蹟の数々——とりわけて両者がいかなる原因から戦いを交えるに至ったかの事情——も、やがて世の人に知られなくなるの恐れて、自ら研究調査したところを書き述べたものである”と書き出している(松平千秋訳、岩波文庫)。

一方、司馬遷は『史記』最終巻である「太史公自序」で、明主賢君、忠臣、義士の事蹟を論評記載することが史官の責務であると記すとともに、聖賢が世に容れられずに憤り、心に鬱積したものとあるときに、往時を語って期待を未来に託すとも述べている。後段は、李陵の事件に巻き込まれて死刑を宣告されながらも、父子二代にわたる史記を完成させるために、自ら願ひ出て宮刑を受けたことを暗喩している。

ヘロドトス、司馬遷の両者とも、後世のために記録を残すことを歴史の目的として意識していた。特に中国においては周代から史官の制があり、王朝の事蹟を記録してきた。司馬遷は“今の世にありながら古の道を記すのは、自ら鑑(かがみ)みるためである”(高祖功臣侯年表六)とも述べている。

歴史的出来事の綿密かつ客観的な記述は、史料批判の方法を確立した19世紀の歴史家ランケの志したところであり、歴史家の基本となっている。しかしながら史実は無数にあり、その選択、配列は歴史家の史観に基づく。伝統的歴史学が、政治史・文化史などを中心として取り上げてきたのに対し、現代歴史学では社会史・経済史・地理学をも総合し、人間活動の総体を分析しようとしている。フランスで1929年に創刊された「社会経済史年報」を拠点としたアナル学派が代表で、大冊『地中海』の著者ブローデルが著名である。

なお、世界大戦の悲劇を体験した哲学者アーノルド・トインビーは、これから人類が滅亡へ赴く道を免れるためには、各民族・国家の相互の歴史と親密になることが必要であり、そのために『歴史の研究』の執筆を始めたとしている(「図説」学習研究社版)。

3. 経済史家の立場

経済史が経済学、歴史学のいずれに属するかは議論があるようである。経済史学を独立の専門科目として確立したのは、1830～40年代のフリードリッヒ・リストを始祖とするドイツ歴史学派経済学である。「共産党宣言」(1848)を執筆したカール・マルクスは、唯物史観に基づく経済発展段階説で経済史にも大きな影響を与えた。

イギリスでは、1910年にマンチェスター大学に経済史教授ポストが設けられて以来、ロンドン、ケンブリッジ、オックスフォード大学その他に経済史講座が設置されている。こうした教授に任命されたときには就任講義を行う伝統があり、経済史の立場についてしばしば言及されている(小松芳喬監修『経済史の方法』弘文堂、1969)。これらの教授は、経済史が歴史学科に所属すると考え(上述180頁)、あるいは歴史学と経済学の二つの大陸を繋ぐ地峡であると表現している(154頁)。

キーワード：土木史、歴史学、技術史、科学史、専門史学

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5; Tel & Fax: 045-339-4244; E-mail: goda@cvg.ynu.ac.jp

経済史学の目的を明記した書物はあまり多くない。中村勝己は『世界経済史』(講談社学術文庫)の序で、“……経済史の全体的見通しをもつことが、(経済史の)個別研究を本来の脈絡のなかに正統に位置付けるために、また経済学や歴史学の均衡のとれた発展のために不可欠なものとして、研究上、とくに教育上ますます要請されていることは何びとも否定できないであろう”と述べている。

4. 美術史家の立場

美術史に関しては、研究や教育の目的を叙述した書物がほとんど見当たらない。これは芸術全般にあてはまる。建築史もこの範疇に入る。美術・音楽は理屈なしに鑑賞できるものであり、その歴史の変遷は誰にとっても興味の対象と考えるからであろう。また、芸術教育では過去の作品がすべて手本であり、歴史を知らなくては新しい創作が困難なためである。

5. 科学史家・技術史家の立場

科学史は、数学、天文学、医学など個別分野の学問史の記述が早い。1910～1913年に大著『大自然科学史』を発表したフリードリッヒ・ダンネマンは、自然現象の関連をより深く洞察するために過去をふりかえると述べている。また最近の著作ではあるが、杜石然他編の『中国科学技術史』(東大出版会、1997)では、“中国の科学技術の発展の歴史を研究把握し、その発展法則を子細に検討することは、「鑑(イミタ)を歴史に借り」、「故(フル)きを温(タズ)ね新しきを知る」働きをなすに違いない”と述べられている。

技術史においても、技術の進歩発展の歴史を学んで先人の苦勞と経験を知ることが、新たな発展のために必要である、という認識は共通である。チャールズ・シンガー他編の『技術の歴史』、R. J. フォーブスの『技術の歴史』、Mauris Dumas の『A History of Technology & Invention』などがその例である。

しかしながら科学思想史の分野では、コペルニクスやガリレオによる自然認識の転換が何故起こったのかを、社会の変革と関連づけて説明する学派が主流となっている。トーマス・クーンが1962年の『科学革命の構造』のなかで提唱した「パラダイム」の概念は、科学史の分野を超えて広く用いられている。クーンに影響を受けた佐々木力は『科学革命の歴史構造』(岩波書店、1985)において、科学史研究は現代の科学の矛盾を解決するための実践的理論であり、哲学や社会学とは別の固有の存在意義を持つと主張している。

6. 土木史の位置付け

上述のような専門史学に比べて土木史研究は蓄積が少なく、土木史学が成立しているとは言いがたい。『明治以前日本土木史』の編集委員長であった田邊朔郎は、“このような史実は今これを集録しなければ散逸してしまい、二度と得難いことを憂えて”調査収集にあたったと述べている。その故に、この書は土木史の基本史料として、歴史家ほかの識者に裨益してきたところが大きい。

土木史の意義について早くから発言してきたのは高橋裕である。酒匂敏次との共著『日本土木技術の歴史』で“土木技術の発展に正しい方向を与えるにも、またその地位をはっきり確立させるためにも、そして一般の人に土木技術者の仕事を理解して貰うためにも、土木技術史の研究はもっと認識されてよい”と述べ、また『現代日本土木史』では、土木技術者がこれまでの発展の経緯のなかから多くの教訓を見出し、新たな発想、柔軟な思考、幅広い見方を与え、これからの進路を考える上で土木史を欠くことができない、としている。一方、小川博三は『日本土木史概説』で、史観をもって貫かれた土木史が必要であるとして、歴史の一切の基盤に土木があり、国土経営の根底に土木があることを明らかにしようとした。

7. 土木史研究の方向について

史学は事実に基づかなければならない。しかし、歴史家は事実収集の尚古家ではない。問題意識を持って事実を分析し、歴史を再構築する。技術史が未来の指針を過去に探るためのものであるならば、先人たちの技術の内容のみならず、それを工夫した時点での社会的・技術的制約条件を明らかにし、先人たちの心理的葛藤のなかにまで入り込めないものであろうか。また、プロジェクト採択の裏面での政治的駆け引き、さらには技術的失敗や事故の遠因を探ることも必要であろう。小説家、伝記作家との協力も欠かせない。容易な途ではないが、稔り多い努力となろう。